Newsletter

東京大学大学院人文社会系研究科
多分野交流プロジェクト研究ニューズレター
http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tabunya/
2000 年 3 月 15 日

26

１９９９年度多分野交流演習を終えて

ワーキンググループ座長　岸本　美緒

年度末の繁忙もあと一頑張りという時期となりました。本年度最後の多分野交流演習ニューズレターをお届けいたします。本号には、各プロジェクトの報告要旨とともに、主査の方々が本年度を振り返ってのまとめや感想を寄せて下さいました。多分野交流演習に参加なさった方々も参加の機会のなかった方々も、ぜひご一読くださいますよう、お願いいたします。

多分野交流演習に学外から参加してくださった客員教官の方々からは、「非常に面白かった」「自分の大学でもやってみたい」というご感想をよくいただいております。様々な分野の研究者が研究科や大学の枠を越えて集まり議論をたたかわす本演習は、大学の授業としては他に殆ど例を見ない贅沢なものといってよいでしょう。大学院生の参加の少なさや、また参加しても発言が少なく「眺めているだけ」に終わりがちな傾向を、何人かの主査の方が報告しておられますが、多くの研究者と知り合える折角の機会ですから、院生の皆さんも是非この楽しさと刺激を自ら味わい、元気に議論の渦に飛び込んでもらいたいと思います。お互い大いに楽しみましょう。

今年度までは、毎年４つの演習を設けていましたが、継続中のプロジェクトに加えて新たなプロジェクトの開設のご希望も増えたため、来年度からは演習の数を７つに増やすこととなりました。また、従来は博士課程の学生を対象としていましたが、実際には修士課程の学生も多く参加していることにかんがみ、修士課程学生の参加・単位取得も可能な形に規定を改正しました。ただプロジェクトによっては参加者の範囲を限定することもあり得ますので、ご注意ください。

最後に、ご多忙中参加してくださった客員教官の皆様、各プロジェクトを中心になって担ってくださった主査の方々、事務を担当してくださった情報メディア室のスタッフの皆様に御礼申し上げます。来年もどうぞよろしく。

プロジェクト案内

「人間と価値：変革と人間観」

主査　小島　毅　水曜５・６限

冬学期に毎週開かれる本プロジェクトの今年度の演習も、全 11 回をもって無事終了した。参加者は毎回 20 名を超え、多分野演習室では手狭なため、215 番教室を使用した。ただ、いささか残念に思えたのは、参加者が多いがゆえの弊害だろうか、全員が討論にまんべんなく参加するという形にはならなかったことである。場は「教官のサロン」と化し、学生たちはことばの饗宴を観戦するだけ、という傾向も若干見受けられた。もちろん、教官側からは、「学生も対等に議論に参加せよ」との、勧誘とも脅迫ともつかぬ呼びかけがたびたびなされたが、普段の権力関係（悪い意味でなく）や、情報量の差（驕るわけでなく）があって、なかなかそうはいかない。進行役に人を得ていれば、適宜、話を「控えめな出席者」に振って発言をうながすこともできたのだろうが、あいにく、私（小島）はその資質を欠いていた。

しかし、一部参加者は演習後に場所を変えて議論の続きを自分たちで楽しんでいたようだし、10 名ほどの学生は毎回常連として演習に出席していたことから推測するに、各自がそれなりに楽しんでくれたのだろう。もちろん、自分たちが「楽しむ」だけでなく、共同討論の成果を対外的に発信する責務も、我々は負うのであろうが。

そんなわけで、平成 12 年度は学生の研究報告を中心にすえ、その公表を視野に入れつつ演習を進めていく。副題は「歴史意識」。修士課程学生の多分野演習としての単位履修も可能になる。西暦の上での節目の年に、３年間のまとめを意図している。冬学期開講だが、５月にガイダンスを開くつもりなので、掲示やウェブページに注意されたい。

前説はこのくらいにして、前回掲載分以降の報告を載せる。いずれもコメント担当者の原稿にもとづき、小島が字句を修正した。

■11 月 17 日　第６回
題材：坪井善明（早稲田大学教授）
「20 世紀のアジア―ガンジー・毛沢東・ホーチミン」
担当：渡辺美季(東アジア歴史社会修士課程１年)

(要旨)

アジアにとっての 20 世紀とは、西欧近代への「対抗・抵抗・受容」の世紀であり、この葛藤の中から「非暴力抵抗(ガンジー）」・「農民主体の社会主義革命（毛沢東）」・「『小国』の異議申し立て（ホーチミン）」が生み出された。そこでこの三人の人物を取り上げ、「20 世紀においてアジアが世界に対してどういう形で貢献したか」という観点で、「20 世紀におけるアジアの意味」を考える。

（コメント）

比較検討すべき三人の側面は、少なくとも①実際の各自の言動、②外国（　世界）における同時代/現在の評価、③自国における同時代/現在の評価、といった風にもっと分けて考える必要があるように思われる。また報告のスタンスは「日本とアジアの関係を考える上で」という点にあったが、一般に日本人が触れることのできる「三人像(研究書等）」には相当のバイアスが掛かっている点には留意すべきであろう。

（討論）

各地域を専門的に研究する諸氏からより多角的な「三人評価」への示唆があった。またアメリカ合衆国の公民権運動の効用からガンジーの再評価が起こったことなどを挙げて、坪井氏の設定した「西欧対アジア」の枠組みへの異議も唱えられた。当日の討論自体は大いに盛り上がったものの、「無謀なことは百も承知だが、良心的な史学とどう噛み合わせて、《大きな流れ》にさらわれないようにするか」と問いかける坪井氏に、正面から切り込んでいくような意見は、全体として出なかったように思われる。

■11 月 24 日　第７回
題材：佐藤慎一（人文社会系研究科教授）
「中国 20 世紀革命論の射程」
担当：吉田豊子（東アジア歴史社会博士課程１年）

本報告は、1900 年代の中国人の革命に関する言説を素材に、当時の中国人が来るべき革命（結果としては辛亥革命になる）について、多様な考え方があったことを、明らかにしたものである。従来のような「革命派」と「改革派」という枠組みに拘らずに、様々な論者個々人、あるいは彼らの思想の相互関連にも注意を払うことによって、当時の中国人の「革命観」に関して、新たな全体像を提示しようとしている。また、単にブルジョア革命だと評価してきた「辛亥革命」の性格は、再検討すべきだという問題提起もなされている。

担当者は、梁啓超は「種族」をどのように考えていたのか？　多くの論者は、当時の中国の民衆がかなり「自由」・「平等」であると考えているが、逆に「不自由」・「不平等」という認識がなかったのか（辛亥革命の捉え方に関わるもの）、の二点を質問し回答を得た。また第８節のタイトルに異議を出してみたが、これは竹越與三郎の著作の影響であることが確認された。

全体討論では、当時の中国人が right（権利）をどのように考えていたのか、中国における法治観念の欠如あるいは西洋社会との法の観念の違い、自由の問題に関連して民国をもう少し長いスパンで研究する必要性、文革以後の革命という語の多様なイメージの問題、などが議論された。

■12 月１日　第８回
題材：坂井洋史（一橋大学助教授）
「「解読」という「言説」」
担当：陳　勇（東アジア歴史社会博士課程１年）
小羽田誠治（東アジア歴史社会修士課程１年）

表題のテクストを構成する論文２篇は、いずれも中国の近現代文学史をどのように記述するべきか、個々の作家の文学史上における位置づけをいかに行うべきかという問題について、巴金を例にとって論じたものである。文学史は個々の作家の軌跡をたどる内在的研究と歴史全体の動きから文学を見る外在的研究を有機的に統合することでつくられるが、従来の研究では、政治史・革命史を重視するあまり、前者が後者に隷属する形になりがちであったという。

そして、文学の無力さを常々唱えつつ、後に「文

学の肯定」に向かい、両者を矛盾しながら並存させていた巴金を例に挙げ、その「無力さ」の意識は「言語－行為」という二項対立の中での古典的なものに過ぎなかったが、矛盾を「批評者」として直視するという「態度」の確立は現代的意義をもつものであるとする。

また、最近の中国現代文学史で巴金が排除される傾向にあることを見て、「排除」に働く暴力性について考察する。そしてこの暴力性を露出させることが今日の文学研究の一つの目的となっているが、その展望はまだはっきりとは得られていないことを指摘し、「相対化」と「多元性」をもとにテクスト解読の可能性を追求していかなければならないと結ぶ。

当日は、中国文学研究の方法、特に「個」の意識に関する問題が議論され、また文学史の内在的研究と外在的研究の統合について、思想史・歴史の立場と比較した上での検討が行われた。

■12 月 15 日　第９回
題材：小島　毅（人文社会系研究科助教授）
「礼教の将来」
担当：廖　肇亨（中国語中国文学博士課程２年）

中国語文化圏はいうまでもなく、欧米の中国思想研究現状と比較すると、日本における香港・台湾の新儒家思想に関する研究の出遅れは明らかである。著者は唐君毅の節日に対する考え方に綜合的分析を加え、新儒家の思想根源（特にドイツ観念論とのつながり）、潜んでいる問題点、ないし現代社会への啓示について独特な見識を示している。

他の思想体系と比べると、儒教は生活様式にいっそう密接に絡みあっている。唐君毅は節日から個人と伝統とが溶けあう接点を見つけ、中国の伝統と、いわゆる民主や科学という価値観とは矛盾しないことを主張した。ただし、民主・科学という概念はドイツ観念論がフランス啓蒙主義の流れを汲んで提出し、唐も自明の真理として信じている。このような基準で孔子や孟子の言説から民主・科学の理論根拠を捜せば、結局は、文献を誤読することになるばかりか、孔子・孟子をドイツ観念論の次元に引き下ろす恐れがあるのではないか、と著者は主張している。

担当者からは、著者の見解に対する若干の補充がなされた。それによって、新儒家への理解がより深められるかもしれない。

一、 著者の論文は唐君毅の思想を静態的に捉えており、彼の思想の変動の軌跡については注意を払っていない。

二、 民主・科学はもちろん啓蒙時代の思惟の産物であるけれども、まだ期限切れではないだろう。これらを儒教を判別する価値基準とすることに問題はあるまい。（儒教は時代の進展に伴い、いつでもほかの新しい価値基準でチェックを受ける必要がある。）むしろ、問題は、民主・科学の中身が何かにある。五四運動時期の民主観・科学観は、今日においても適用するのかどうか。また、民主・科学というものの欠陥に対して儒教はほかの参考点を提供することが可能ではないか。

三、 中国現代思潮の三大流派（マルクス主義、自由主義、新儒家）のそれぞれの、伝統に対する認

識の異同、それぞれと現実政治との絡み合いについて、さらなる掘り下げが待たれる。

討議の中では、思想研究の方法と態度、現代新儒家として活躍中の人士への評価、儒教と近代的な諸価値との関係などが論じられた。

■１月 12 日　第 10 回
題材：並木頼寿（総合文化研究科教授）
「著名の匪を撫す：挙人朱鳳鳴の捻軍招撫論について」
担当：水口拓寿（東アジア思想文化博士課程２年）

論文の概略：

中国清代の咸豊７年（1857）、折から安徽北部等で活動していた捻軍の盟主・張洛行に対し、旧知の挙人・朱鳳鳴が招撫を試みて殺害された。本論文は、朱の側からこの一件の意味を問う。
朱はこれ以前にも招撫に失敗したことがあるが、いずれも全く勝算がなかったわけではない。当時の捻軍は郷紳層と繋がりを持ち、むしろ郷村秩序を守るような動きさえ見せていた。

朱は咸豊４年（1854）の「上袁給諫撫匪六議書」の中で、「匪」の抹殺ではなく、彼らの一部を郷村秩序に取り戻すことによって、その再編成を図ることを訴え、そうした目的のためにこそ、特に「著名の匪」の招撫に尽力すべきであるとした。この発想は、従来的な「賊を以って賊を攻む」とは似て非なるものである。前年の「用民制賊議」においても、朱は「民」と「賊」（「匪」）との中間に郷村の「豪傑の士」を位置づけ、その独特な在地的勢力を、郷村秩序を構成する重要な主体に数えた上で、彼らの懐柔を発議した。

結局、彼らは朱ではなく捻軍の側に就いていったが、朱の所論は咸豊７年の招撫に至るまで変わらなかった。そして、朱自身は張の説得に失敗して落命したものの、後に清軍は反乱鎮圧の営みの中で、まさに朱の方法によって秩序を回復していったのである。朱は実のところ、「士風」が衰え民に「教化」が及ばなくなったことに、捻軍勃興の根源因を求めた人物であったが、その招撫活動は、捻軍を含む当地の郷村社会の一面を見通したものであったと言えよう。

自由討論：

担当者が提出した「捻軍の反乱を経て、当地の郷村秩序に重大な変容は認められるか」という問題に発して、反乱以前の秩序は辛亥革命さえ飛び越え、現在にまで繋がるものを持っているとの見解が著者他から示され、また著者は、村落が内部で強い結束を見せたという点では、むしろこの「乱」の期間こそ最たるものではなかったかと付言された。

また、捻軍の反乱には白蓮教の影響が見られると言われてきたが、彼らの中でそれが内面化されていたか否かという疑問が呈され、ここから発展して、彼らが自衛ネットワークの存続のための戦略として白蓮教等を奉じたものと捉え、これを保険・株式・賭けなどの比喩により説明する試みが盛んに行われた。

この他、反乱の根源因・宗教性やジェンダー論の有無等に関し、太平天国の反乱その他との比較論が交わされ、「豪傑の士」による秩序維持等の

問題について、江戸時代の日本との比較にも論が及んだ。

■ 1月19日　第11回
題材：濱下武志（東洋文化研究所教授）
「近代東アジア国際体系における日本とアジア」
担当：安藤潤一郎（東アジア歴史社会博士課程２年）

本論文は、アジアで最も早く「近代化」＝「西欧化」に成功したとされる近代日本の動きを、東アジアから東南アジアにかけて機能した広域地域秩序たる「朝貢システム」の文脈の中で再検討したものである。

著者によれば、「朝貢システム」下における国際体系のダイナミズムは、「中心」たる中国の主張する「宗主権」－「地政」と、周縁諸国の主張する「主権」－「権政」との相互作用として捉えることが可能であり、明治期日本の「西洋化」もまた、「主権」を求める周縁国が選択した「ナショナリズムへの手段」であった。つまり、日本は、「朝貢システム」の秩序を前提に、西洋経由で自らを均質化・集中化・求心化することで、中国に対抗しつつアジアに参入してゆこうとしたのである。

具体的には、朝鮮主属論・清朝との条約交渉・植民地をめぐる「国民の造成」や統治方式の問題などの事例が取り上げられ、①日本の諸施策が「清朝およびその『宗主権』に対する対応策」という面を強く有していたこと、②にもかかわらず、こうしたアジアからの動因は顕在的には認識・対応されないまま「アジアからの乖離」に帰結していったことが示されており、そのうえで、より長期のアジアの歴史的文脈と域圏のダイナミズムに則した近代日本の再定位が主張されている。

これに対して、担当者からは、主にナショナリズムおよび植民地の問題に関連して、以下の質問・コメントを提示した。

① 近代以前の「ナショナリズム」と明治以降の「ナショナリズム」とは同一に論じられるのか。また、明治期の「ナショナリズム」は清朝よりもむしろ「西洋」の脅威に由来するものではなかったか。

②「地政」を敷くべき「中心」たる中国で、きわめて典型的な姿を呈しつつ展開したナショナリズムは、「前近代」とのいかなる連続性と断層を基層に持っているのか。また、その現在的展開はどのように位置づけられるか。

③　日本植民地の原理の歴史的変遷、また、「新中華」としての日本植民地はどのように捉えられるのか。

討議においては、①著者が無限定に使用している「近代」概念の歴史性、②日本の植民地統治の哲学的背景、③「主権」とは何か、④「アジアへの参入」というイメージの有効性などについて疑義・質問が提示された。特に③に関しては、「小中華」を含むのか、「国家主権」と同様の概念なのか、といった質問に対して、著者から「『宗主』という場を基礎にして対抗的に出てくる考えかたを『主権』と呼ぶ」という回答が示され、本論文の理論的な側面をめぐる活発な議論が行われた。

プロジェクト案内

「アジアと日本の地域交流：６０年代－アジアの選択」

主査　桜井由躬雄　木曜５・６限

５０年代はアメリカの好景気を背景にアメリカ大衆消費文明の生活様式がその優越性を世界に謳歌し、ソ連とともに冷戦構造をアジア諸国に強制していく。その一方で、４０年代後半に独立をはたし、その勝利の祭典を５５年にバンドンで華々しく挙行したアジアの多くの国々において、民族主義と社会主義、そして民主主義が幸福な結婚が夢見られていた時代であった。６０年代はその結婚が繁栄のために破れ、そして５０年代の政治的価値観が大きく変改されていく時代である。

稚拙な民族主義は政治的経済的にアジアを混乱に巻き込む。

政治的には南アジア世界の政治動向は決定的に印パ対決の軸上でしか動かず、インド、中国はその国内問題に強く制約されて、６２年中印国境紛争を引き起こし、インドネシアはその国家の正統性を維持するために拡張主義に転じてマレーシアと対決し、バンドン精神は６０年代はじめに解体する。経済的には多くの新興アジア諸国が、新植民地に反対する一国経済自立の道であった。アメリカの形成する世界市場とこの一国経済主義の矛盾は５０年代後半に顕在化する。アジアの経済的停滞性が広く喧伝される。しかし、その一国経済主義、反新植民地主義は現実には冷戦下の東西両陣営の援助政策により、依存経済をつくりあげていた。６０年代当初のアジアは、日本でのアジア研究の高まりとは裏腹に、政治的混乱と経済的困窮の袋小路のなかにあった。

そのなかに５０年代末から新世代のリーダーたちが登場してくる。タイのサリットを代表とし、リークアンユー、朴正熙らに代表される新しいリーダーが求めた政策が開発独裁であり、これはマルコス、スハルトによって追随される。日本では同時期に池田内閣が誕生している。それは国際的には民族主義的政策の廃棄であり、経済的には国際市場経済への積極的な参加である。それは政治を中心とした国家作りから、経済を中心とした政体への大きな変革である。一台湾研究者は台湾における同一の変化を「（国民党による）殺しの５０年代」「殺さない６０年代」と表現する。

しかし、アジアの一群の指導者層が経済主義によって、袋小路を突破する戦略を選択したときに、国内統一が成功せず国内的、国際的契機により分裂、または内乱として長期化したインド、パキスタン、ベトナム、ビルマなどの国々、ビルマや中国のように新しいリーダーが権力闘争に敗れて世代交代の進まない国々、また国内社会対立が深刻なインド、パキスタン、さらに国家の建設そのものに失敗したカンボジア、ラオスなどの国々ではなによりも統一や安定のための政治的戦略が先行し、５０年代との画期が明確でない。６０年より７５年まで続くベトナム戦争、６６年から７６年にかけての文化大革命はいわば５０年代的状況の６０年にかけての発現といえる。

経済主義の政治主義への勝利は、６０年代末のNICS の成長開始、アセアンの成立によって明示される。８０年代には経済発展がすべてのアジアの国々の価値の指標になる。そのなかに政治主義は経済主義、もしくは国際市場経済への参加を余儀なくされる。中国の新経済政策、ベトナムのドイモイ、カンボジア戦争の終結、ビルマの開放政策への転化はその象徴である。７０年代は５０年代的な価値と８０年代的価値が最後の死闘を演じた時期である。２０００年度演習においては「７０年代、幻想からの離脱」と題して、７０年代、日本を含むアジアにおける展開を考えてみたい。

プロジェクト案内

「言語・文化・越境」

主査　沼野　充義　木曜５・６限

このプロジェクトは 11 月以降、以下の３回の会合を行い、本年度分の会合はこれで締め括った。
11 月 18 日（木）金　英「ヨシフ・ブロツキーの亡命詩学」
12月2日(木)竹腰祐子「ＧＭからＧＯＬＥＭへ　伸縮する＜わたし＞」
12 月 16 日（木）安藤宏「近代日本文学における一人称小説の可能性について」

今回は、この３本の報告要旨に加えて、ニューズレターの前号までに掲載できなかった２本の報告要旨をまとめて以下に掲載させていただく（要旨の執筆はそれぞれの報告者自身による）。

9 月 30 日（木）菅原美佐（東京都立大学大学院博士課程／ドイツ演劇）
「現代ドイツ演劇の諸相」

本報告は、「今世紀における舞台芸術の諸問題」、「クリストフ・マルラーターの舞台芸術」を論じる２部構成で発表した。

［第１部］舞台芸術の言葉とそれを語る表現法の変容をみてゆくと、文字テクストが言語芸術へと移行し、さらにはノイズとしての「音声」が復権するに伴い、言葉の意味を解体する音声に新たな可能性が求められていったことがわかる。かつての共同体的空間が消滅し空間概念が変容を迫られたいま、「声の文化」の旧いトポスを内に抱えたまま、「文字の文化」との狭間で往復しつづける舞台芸術は「文字にもとづく声の文化」においていかにありうるのだろうか。

［第２部］マルラーターは 1951 年生まれのスイス人演出家。第１部で設定した問いを念頭に、ブームのきっかけとなった、彼の演出による『ヨーロッパ人を絞め殺せ、絞め殺せ、絞め殺せ、ある愛国的夕べ』（初演 1993 年、ベルリン）を取り上げ、その舞台の構造的特徴ついて、ヴィデオを見ながら細かく検証した。

まさしく「多分野的」な場である「舞台芸術」を広い視野から捉え直すためにも、それぞれの専門領域から発信されながら、共通する問題意識に基づき専門を超えた交流の実践を目指す多分野交流に自分なりの「舞台芸術」試論をリンクさせ、批判にさらすことができたのは、大変有意義であった。発表は自身の問題意識の混沌をまとまりのないまま、生で提示したにもかかわらず、多分野交流演習の大きな器に救われるように、各分野の専門家の方々からあたたかな励ましと示唆に富む御意見をいただいた。好奇心に満ちた学生の方々との交流も刺激的で、毎回が、発表の方法から内容にいたるまで、思いがけない発見や驚くような展開があり、新鮮であった。

10 月 21 日（木）柴田元幸（人文社会系研究科助教授／アメリカ文学）
「アメリカ文学における＜家＞」

アメリカ文学における「家」ということをテーマにお話しした。概してアメリカ文学は、「動くことは善である」が暗黙のモットーであるかのような文学だが、それがいったん立ち止まると、人々とは往々にして、家を建てる。フォークナー『アブサロム、アブサロム！』のトマス・サトペンの館、フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』のジェイ・ギャツビーの館のように、それらの家

は、その人物の自己実現のあかしであり、自己創造への意志の具現である。建国当時、フランクリンが自己を一から作りつつ国を建てたように、のちのヒーローたちも、自己を作り、家を建て、それによって間接的に、それぞれアメリカという国を再定義する。

種々の地域の文学を専門にしている皆さんの前でこういうお話をすると、各国文学の違いが明らかになって面白かった。まず、イタリアなど、歴史の古い国では、そもそも家を「建てる」という発想がない。また、家を建てることの背後にある、自己創造への意志がヨーロッパの文学ではアメリカ文学ほど顕著ではないし、自己定義の欲求についても同様だという。それに対し、ロシア文学ではアメリカ文学同様、ロシアとは、ロシア文学とは、という問いかけがつねになされているという。やはり、歴史的に見て文化的に周縁に位置する国ほど「自分」を定義する必要があるようだ。

ひとつの国だけ見ていると自明に思えることも、他国から見ると全然自明ではないことも多い。リクツではわかっていても、それがこの多分野交流演習のように実感できる場は、実はそれほどない。大変貴重だと思う。

11 月 18 日（木）金　英 （Kim Hyun Young; 人文社会系研究科博士課程／ロシア文学）

「ヨシフ・ブロツキーの亡命詩学」

1987 年にノーベル文学賞を受賞したロシア詩人ヨシフ・ブロツキーは、1972 年にソ連からアメリカに亡命しており、またその詩的世界がロシア的なものを越え、むしろヨーロッパ的なもの、さらには世界文化にその文脈をおいているがため、「一国一言語一文学の枠を超えて交通しあう」という本演習の目的に最適の対象であったのではないかと思われる。今回の発表ではソ連という一つの＜帝国＞からアメリカというもう一つの＜帝国＞へ亡命するというブロツキーの自伝的要素が彼の詩的世界に及ぼした影響を中心に、＜空間＞、＜時間＞、といったブロツキー独特の哲学的概念装置との関係の中で語られている＜言語＞について、さらにバイリンガル詩人としてのブロツキーについて考察したものであった。

私が東大の大学院に留学して今年で５年目になるが、今まではいつもロシア文学を専門にしている人たちの前で発表しており、またその研究内容もロシア文学の枠の中にとどまりがちだったので、いつも物足りなさを感じ残念に思っていた。ところが今回の多分野交流での発表では、さすが各分野の最前線で活躍されている方々が集まっている授業だけに、私の分析に対して今までとは違う角度からの新鮮な解釈を色々と提示していただき、私のブロツキー研究がより一層幅を広げられたのではないかと思われる。一つ残念だったのは『大航海』の編集長でいらっしゃる三浦（雅士）さんが時間の関係上早くお帰りになったため期待していた三浦さんのコメントが聞けなかったことであるが、非常に実りのある授業だった。

12 月 2 日（木）竹腰祐子（人文社会系研究科博士課程／ドイツ文学）

「ＧＭからＧＯＬＥＭへ 伸縮する『わたし』」

前世紀の変わり目にプラハに現れプラハを描い

た、通称幻想小説家グスタフ・マイリンク（1868-1932）は、自己紹介のそぶりを作中好んで繰り返す。短編「GM」は、この傾向を極めたもの。タイトルは、主人公と作者の名前の頭文字とプラハの街に刻み込まれるさら地の模様の記号を兼ねている。ここに作者がほのめかすのは、意識の検閲を通過済みの自画像と、書くこととは何か、への釈明である。官僚と女優の間の私生児としての出生、訴訟事件を挟んでの、銀行家から作家への遅い転身、各種神秘主義の多年にわたる渉猟と、自意識の発展のためには申し分ない伝記的要素を備えもち、風刺にゴシック・ロマン風読み物にと、世相の逆さ吊りにより書くことを始めて破壊と崩壊の色濃い、掻いて欠くことに向かっていく。第一次大戦中に発表されるやたちまち一世を風靡した「ＧＯＬＥＭ」のゴーレムに、マイリンクはもはや土くれの形すら与えていない。だが「ＧＯＬＥＭ」を書くことにより、「GM」での予告通りにプラハの街にＧｏｌｅＭの都市の刻印を押したのだ。

発表時には、ゴーレム表象史についての概観、作品にちりばめられた象徴群の謎解きへのヒント、そしてそもそもなぜ「ゴーレム」がベストセラーたりえたかという根源的な問いかけなど、数々のご教示をいただいた。

12 月 16 日（木）安藤宏（人文社会系研究科助教授／国文学）

「近代日本文学における一人称小説の可能性について」

お誘いを受けて気軽に参加してみたところ、実は今年度最後の締めくくりであったことを知り、あらためてわが身の責任と暢気さに身の引き締まる思いがした。外国文学を研究している皆さんを思いきって“挑発”してみようという野心から選んだ課題ではあったが、やはりテーマが少々大きすぎたようだ。おそらく日本の近代小説ほど文学者が主人公に選ばれることが多いケースも希であろう。「私小説」というタームを用いるとすぐにその狭隘性云々、という議論に傾いてしまいがちだが、むしろそこからなにがしかの可能性を救い出したく、こうした形態の持つ必然と可能性について考えてみたかったのである。日本の散文芸術は誰が誰に語るのか、という具体的なシチュエイションを前提に発達を遂げてきた側面を持つが、近代写実主義はこうしたメタ・レヴェルの発想と本来相容れるものではなく、両者の折衷形態として、「小説家小説」が独自の発達を遂げることになったのではないか。同時にそれは、叙述に隠れた一人称が潜在するといわれる日本語の特色にも関わる問題であり、言文一致の文体でいかに非現実世界を語って行くか、という要請にも深く関わっていたはずである。発表後の楽しい「忘年会」も含め、参加者からさっそくいくつか、それぞれの国における一人称小説の例の示唆を頂き、あらためて特殊と普遍の問題について考えさせられた。

「多分野交流演習なんてどうせうまく行かないんでしょ」という声がある。確かに一般論として言えば、われわれの人文社会系研究科・文学部の場合、とりわけ＜語学文学系＞がおそらく一番「多分野交流」に向かないということは、誰の目にも

明らかである。しかし、初心に立ち返って言えば、だからこそこういった試みを始めたのではなかっただろうか。

実際、私も自分のプロジェクトの運営には、正直なところ、最初はかなり戸惑いがあった。それでも２年目の今年は多少軌道に乗ってきたという手応えがあり、参加する大学院生も私の研究室から指導教官に駆り出された某大国文学の専門家だけでなく、英・独・イタリア・中国・日本などの分野からさまざまな顔ぶれが集まるようになってきた。出席者数も毎回 15 人から、多いときで 30 人近いこともあり、かなり賑やかである（ただし実際に単位を取得する学生はそのごく一部だが）。これも出講してくださった学外からの先生方の熱意と、学内の少なからぬ同僚・諸先生方の御協力のおかげであり、ここで改めて心からお礼を申し上げたい。「どうせうまく行かないんでしょ」とおっしゃる同僚の方々にも、ぜひ一度は覗きに来ていただきたいと思う。

毎回の会合は、報告も興味深く、その後の議論も楽しく活発といっていいが、問題がないわけではない。これはおそらく多分野だけに関わることではないので、あえてここに書かせていただくが、その問題とはおそらく「議論のない文化」ということだ。報告の後の議論は「活発だ」といま書いたばかりだが、それはじつは私と４人の学外からの先生方の間のことであり、大学院生たちに水を向けても、彼らの口は重く、なかなか議論に加わってくれない。自分の専門から離れたテーマなので自信がないとか、先生方に遠慮している、といったこともあるのかも知れないが、根はもっと深いように思う。つまり、様々な観点から対象の多様さに迫り、自分の見方を他者の視線にさらしながら相対化し、その結果新たな光景が見えてくるのを楽しむといった、知的風土が欠けているのではないか、ということだ（飲み屋でのどうでもいいことについてのくだらない雑談の文化というものはあるけれども）。

他の研究室のことはいざ知らず、少なくとも私のスラヴ文学関係の授業で最近目立ってきているのは、大学院生たちと討論しようとしても彼らがなかなか口を開かないため最後まで教師の一人相撲に終わってしまう、という状態である。自分の講義に学生の口をはさませないとか、自分の絶対的な権威にちょっとでもたてつくような学生に青筋を立てて怒るといった偉い先生はいまどき珍しく、人文社会系の同僚たちを見ても大部分は至極「民主的」な方々なのに、その下で育ちつつある若い研究者たちがなぜこれほどおとなしく「自分の殻」に閉じこもって、他者の視線に自分の身をさらそうとしないのだろうか。おそらく、そういった自由な知的議論のための訓練もそのための場もまったくなかったからではないか。「多分野交流演習」の前提は、もちろん、各自がきちんとした専門を持っていることであり、専門的修練を軽視して他人のやっていることに何にでも軽薄に口を出すなどということではない。しかし、文学部的な知の真価が厳しく問い直されているいまの厳しい時代を行き抜いていくためには、専門的権威の鎧を脱ぎ捨てて初めて成り立つ自由な議論のフォーラムが必要なことも確かであり、じつはそういった場を提供することこそが多分野交流演習の

最大の課題ではないかと思う。

　というわけで、来年度はこれまでの経験を活かして、さらに活発な議論ができる場を目指し、「文化の環境と交流」というタイトルのもとにもう一度、３年目の演習を行なう予定である（ただし冬学期のみ）。その後で、３年間の蓄積をもとに本の出版を考えたい。単なる論文集ではなく、多分野の精神を生かした共同執筆による新たな形態が可能ではないか、などとぼんやり考えている。とはいえ、そんな先のことを言うと鬼に笑われるので、とりあえず今後とも無理はせずに、一回一回の演習と日々の交流を大事に楽しんでいくという姿勢で続けたい。先輩同僚の諸先生方、大学院生の皆さんの積極的な参加と御協力を引き続きお願いいたします。

プロジェクト案内

「情報と文化：文化資源と人文社会学」

主査　小佐野重利　月曜５・６限

第８回と第９回の演習についてかんたんに報告し、今年度の短い回顧を付す。

第８回は１１月２９日、木下直之（総合研究博物館）、佐藤健二（社会学）両氏が、総合研究博物館の展覧会「ニュースの誕生 ―かわら版と新聞錦絵の情報世界」をめぐって報告した。場所も博物館で実施した。ニューズレター原稿の執筆者佐藤（康宏）は集中講義のため不在で、この報告と討議には参加しなかったが、展覧会そのものが「文化資源学」と名づけられた新しい学問のよき実践例だったと認識している。その意義は、社会情報研究所が保管する小野秀雄コレクションというきわめて多義的な資料群を素材にしたこと。専門と所属を異にするメンバーによる研究会を組織したこと。すべての資料に記された文字を活字化し、さらにはデータベースとしたこと。展示会場において効果的な提示の方法を工夫したこと。結果的に、新聞研究の資料として一個人が収集し寄贈したコレクションは、人文社会系の多方面の研究者の好奇心をそそり観客をおもしろがらせる資源となって蘇った。詳しくは展覧会カタログとＣＤ－ＲＯＭを参照されたい。

最終回となった第９回は１月１７日、報告者は京谷啓徳（美術史学）、小佐野重利であった。京谷氏の題目は「サブカルチャーと文化資源学 ―浅草オペラの場合―」。大正６年から１５年にかけて浅草六区で公演されたオペラの歴史をその前史からたどり、実態と残響までを論じた。随時ＣＤで音曲を流し（「コロッケの唄」の原曲が持つ捨て鉢な明るさなど意外で印象的）、榎本健一が近藤勇や孫悟空を演じた映画の中のオペラのパロディーをヴィデオで見せる報告は、オペラが日本に最も根づいていた時空を再体験させ、その後の討議とともに、大衆文化・大衆芸能と日本近代文化史の交錯を浮かび上がらせて興味深かった。小佐野氏の題目は「身ぶりの資源化は可能か？ ―美術作品にみる身ぶり表現を材料にして―」。人間の身ぶりが日常生活→演劇→形象美術の順序で成文化・定式化するという先行研究などを受け、キケロ『義務について』や弁論術からシャルル・ル・ブランに至るヨーロッパの身ぶりに関する言説を概観し、最後にヤン・ファン・エイクの「アルノルフィーニ夫妻の肖像」（ロンドン、ナショナル・ギャラリー）に描かれた身ぶりの意味について、最新の研究を論評した。

今年度の演習を振り返って第一に想起されるのは、学生の参加者が少なく教官ばかりが多かったこと。もともと多分野交流演習にはその傾向があるようだが、この演習の場合、既存の専門分野に属さず文字どおりの多分野にわたる文化資源という概念が、既に各分野の専門家を目指している博士課程の学生たちの心を動かさなかったということだろうか。しかし、学生にとっては惜しい。ここで行われた、ときとして異様といっていいくらいに充実した報告は、概ねあなたがたが研究している領域のすぐ近くで、いままさに起きている事柄に関するものだった。それらに触れることは、あなたの研究や生き方に何か大きな発展をもたらしたかもしれないのだけれど。

また、新しい専攻を設けようとする本研究科の概算要求の作業と連動していたために、学生が参

加しにくかったのだろうか。無理のない事情ではある。しばしば授業というより長時間の会議のようだったし、演習の合間を縫って同じようなメンバーで概算要求のための会議が重ねられた。研究と実務にまたがりこれほど参加者を疲れさせる演習は前代未聞だろう。こうして最後のニューズレターを書く頭ももはや重い。一方で、ほとんど学生抜きの教官同士の親睦の機会として非常によく機能した演習だったとも思うが。ハード・ワークの方は二度と御免こうむりたいけれども、関係者の努力とここで費やされた長く濃密な時間とがともかくも文化資源学の母胎となったのは幸いだった。来年度から本研究科に「文化資源学専攻」が誕生する。この演習もまた来年度は文化資源学専攻の教官を中心に継続される予定である。

なお、今年度の演習の内容をもとに、文化資源学の教科書ともなるような一冊の書物をまとめることが要請されている。関係の教官には報告内容に再検討を加えた原稿の執筆を、関心はあったのだけれど出席できなかったという教官・学生の皆様には出版後の御一読をお願いしたい。といっても、この本の構成を考えるのは私の役目らしいのだが、締切り過ぎてニューズレターを書いている身にいまそういう余裕があるはずがない。いずれ主査と相談の上、報告内容を取捨選択し、新たな執筆者も加えて構成案を作り、９月に原稿が揃うように手配したい。執筆依頼後にはまさかこちらが原稿の催促までしなければならないのだろうか。文化資源学はどこまでも続く。

（文責　佐藤康宏）

「多分野交流ニューズレター」
第 26 号
平成 12 年 3 月 15 日発行
東京大学大学院人文社会系研究科
多分野交流プロジェクト研究
ワーキンググループ事務局発行
責任者　岸本　美緒
TEL: 03-5841-3898

連絡先　情報メディア室
TEL: 03-5841-3880
FAX: 03–5841-8949

Edited by Kaori Domae
Designed by Noboru Koshizuka